



2024年9月30日 号外

JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報渉外委員会



多様性に応える 魅力あふれる学会に

理事長 酒井 昭 典



目 次

- 理事長に就任して
- 前理事長のご挨拶
- 副理事長に就任して
- 理事に就任して
- 新名誉会員のご挨拶
- 新特別会員のご挨拶
- 物故会員への追悼文
故 茨木邦夫名誉教授を偲んで
- 2024年度 各委員会委員
- 教育研修会のお知らせ
- 関連学会・研究会のお知らせ
- 編集後記



この度、岩崎倫政前理事長の後を受け、日本手外科学会（日手会）の第11代理事長に就任いたしました産業医科大学整形外科の酒井昭典です。たいへん光栄に存じますとともに、伝統ある日手会をさらに発展させるという重責に身の引き締まる思いです。代々の理事長が取り組んでこられたことを継承するとともに、時代の要請に呼応してさらに発展させる所存でございます。誠心誠意尽力いたしますので、理事、代議員、会員の皆様の変わらぬご支援とご協力を賜りますよう、引き続きよろしくお願いいたします。

私が掲げる目標は、日手会が会員の皆様にとって益々“魅力あふれる学会”になることです。手術手技を向上させたい、術式の成績を明らかにしたい、病態を深く理解したい、新規医療材料を開発したい、産学連携を推進したい、など会員の皆様には様々な要望があると思います。会員の皆様がどこに魅力を感じているのか、時代が何を求めているのかをしっかりと把握しながら、その多様性に対応した懐の深い“魅力あふれる学会”に発展させることが私の使命だと思っています。より高度な技術やノウハウを生み出すことができる大きな集団脳に拡大させたいと思っています。

“魅力あふれる学会”になることの具体的な行動目標は、1) 次世代を担う若い手外科医の育成 (education & training)、2) 手術手技の向上と病態解明の推進 (surgical skill & implementation research)、3) 革新と産学連携の推進 (innovation & collaboration) です。人材育成に力点を置き、

優秀な若手をできるだけ登用し、持てる力を発揮していただきたいと思っています。手術手技向上のためワークショップやカダバートレーニングなどスキルアップする機会を数多く設けたいと思っています。国内外の関連学会との連携や海外のHand Societyとの交流を活発にします。手外科の診断や治療が充分に行われていない世界の地域で支援活動を行い、国際支援・国際協力に取り組みたいと思っています。このような活動を通じて、日手会のプレゼンスを高めたいと思っています。臨床研究と基礎研究を推進し、イノベーションへと繋げ、企業とも協働し、さらに、臨床現場で患者さんに寄与できる実装科学を支援していきたいと思っています。

現在、目の前の重要課題がいくつかあります。ひとつは学会の事務局移転です。働き方改革により長時間労働の是正と労働生産性の向上が求められている中で、日手会の事務内容を見直し、内容も量も適正化していかなければなりません。日本専門医機構認定サブスペシャルティについては現在まだ認定に至っておりませんが、機構側からの審査結果・意見に対応しながら継続して申請してまいります。「橈骨遠位端骨折診療ガイドライン」は前回の改訂から7年が経過しました。第3版の策定に取り掛かりたいと思っています。「手外科」や「手外科専門医」について、国民への周知が未だ充分とは言えません。国民への周知や手外科疾患の啓発活動を促進してまいります。このほかにも課題がたくさんありますので、着実に精力的に取り組んでまいります。

昭和32年の日手会創設以来、多くの先達が築いてこられた輝かしい伝統と成果を大切に守りながら改革を進め、日手会のさらなる発展に寄与したいと思います。日手会会員の皆様と共に、会員でよかったと思える“魅力あふれる学会”にしていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



前 理 事 長 挨 拶

前理事長 岩 崎 倫 政

北海道大学 大学院医学研究院 整形外科学教室



7 月中旬を過ぎ(本原稿を書いている)、札幌の地でも暑さが厳しい今日この頃です。皆様、いかがお過ごしでしょうか？

私、2022年4月から2024年4月までの2年間、第10代日本手外科学会(日手会)理事長を務めさせていただきました。この期間、理事、代議員を中心に日手会会員の皆様のご支援、ご協力により、この重責を何とか果たすことができました。改めまして、会員の皆様に厚く御礼申し上げます。私の在任中、新型コロナウイルス感染症の拡大も落ち着き、2023年5月には2類から5類に移行しました。これにより、学術集会も対面が中心となり会員同士の交流も活発化したと思います。また、海外学会への参加も増え、国際交流も再開したと感じています。

理事長就任時のあいさつで、私自身が考える日手会の本質的課題として、1)若手手外科医の育成、2)次世代のリーダーたる手外科医を育てる、3)ダイバーシティ(多様性)の推進、4)学術的基盤の向上を挙げました。本質的な課題には、解決のためのdeadlineやマニュアルは存在しません。したがって、我々自身が、本課題に対して積極果敢に取り組んでいく必要があります。そのため、上記1)、2)、4)に対して新たな賞の創設(英語論文賞、天児民和賞)、3)に関しては役員選挙の一部改訂を行いました。同時に第66回(佐藤和毅会長)および第67回(面川庄平会長)の学術集会において機会を与えていただき、私自身が考える課題解決に繋がる内容の理事長講演をさせていただきました。これらが、上記課題解決に繋がり、少しでも日手会さらには本邦の手外科の発展に寄与できればと願っております。

ポストコロナ時代の到来に加えて、医師の働き方改革、遠隔医療やAI、VR、Roboticsなどの先端テクノロジーの本格導入、学術集会開催をはじめとする学会を取り巻く環境の変化、ライフサイエンスを含めたアカデミア領域における本邦の地位低下等、医療を取り巻く環境は激変し、我々にもこれらに対する対応が求められています。日手会も例外ではありません。私に理事長のバトンを繋いでくださった平田仁先生は、パンデミックの時代において“ピンチをチャンスに変える”を合言葉に本学会を牽引されました。私は、まさに今こそ、この発想が重要だと考えます。

上述した課題に加えて、手外科のサブスペ認定に関する取り組み、国際学会における日手会の地位向上など迅速な対応が求められる課題も残されています。その多くは、私が理事長として取り組んできたものですが、これからは、酒井昭典理事長の強いリーダーシップの下、これらの課題が解決され、日手会がさらに発展し続けることを期待しています。

最後になりましたが、皆様の益々のご活躍を祈念し、前理事長からのご挨拶とさせていただきます。

副理事長に就任して

副理事長 田 尻 康 人

地方独立行政法人 東京都立病院機構



東京都立広尾病院の田尻康人です。理事二期目となり、このたび整形外科の手外科学会副理事長を拝命することとなりました。誠心誠意役目を果たせるよう努めたいと思いますのでどうぞよろしくお願い申し上げます。

私は現在、日本整形外科勤務医会の会長として日本整形外科学会の副理事長を務めており、日整会では執行部として新基幹システムJOINTSの導入に関するワーキング、また情報システム委員会や災害対応委員会を担当しております。また、日本専門医機構の基盤学会として日整会には様々な専門医機構の会議資料や会議録などが提供されるため、これまでも専門医機構のサブスペシャリティーに関する情報等を手外科学会の専門医制度委員会の担当理事、委員長、アドバイザーの先生方に提供させていただきました。このような観点から日整会と手外科学会との連携を密にとることが私に求められる役割の一つであると認識しております。

これまでの手外科学会理事一期目の活動としましては、社会保険等委員会担当理事として、令和6年度の診療報酬改定において、①手術通則14へのK059-2関節鏡下自家骨軟骨移植術の追加、②複雑な腱手術に対する入院外加算、③K098 手掌屈筋腱縫合術の廃止の3項目を提案し、建部将広委員長とともに厚生労働省の医療技術に関するヒアリングに望みましたが、残念ながら③の廃止手術のみが認められる結果となりました。新規技術の採択には、明確なエビデンスやガイドラインが求められており、提案書にも記載するようになっていきます。厚労省の立場として新規技術を認めることは、他の診療科に対しても説明可能な明確なメリットが必要であるためです。2年後の改訂に向けて、次期委員会には必要なエビデンスの構築を含めた提案書の構築をお願いしたところです。また、西田圭一郎前副理事長が担当されていた専門医制度委員会の委員として、手外科専門医の機構認定のためのサブスペシャリティー領域専門研修制度整備基準、手外科専攻医研修マニュアル、手外科指導医マニュアルの作成等に微力ながら協力させていただきました。手外科学会の専門医制度は、すでに学会認定の専門医資格として指導医まで確立されたシステムです。専門医機構で認定された一部のサブスペシャリティー領域と比べても制度としてより進んだ状況ですが、機構認定の専門医制度となるように引き続き努力をさせていただきたいと存じます。

今回副理事長として担当させていただく委員会は、緊急事態対応委員会と財務委員会となります。緊急事態対応委員会は新型コロナウイルス感染症のパンデミックに際して、学術集会の運営方法等を検討するために編成された委員会とっており、いわゆる危機管理対応がその中心的役割になると考えます。コロナは現在も流行が続いていますが、5類に指定されひとまず学会開催に対する影響はなくなったと理解しています。むしろ、地震や洪水などの大規模災害や、サイバー

テロなどのシステム障害の方が現実的には対応が必要となるリスクが高いと考えます。来年1月には事務局の担当会社変更が予定されていることや、手外科の認定施設の申請、審査、管理を行うシステムの開発導入が予定されていること、またこの委員会の委員が関東地区に偏っていることなど、学会のBCPの観点から確認・検討すべき課題があると感じていますので、順次取り組みたいと存じます。また、財務委員会の担当としては、以前に委員を務めた経験から、現在の手外科学会の財務状況は安定した運用が行われている状況であると理解しています。とはいえ、今後もKCSのシステム開発費など、通常の経費以外の支出が予定されており、また新しい事務局の運用費も未確定のため、慎重な予算編成が求められる状況です。継続して健全な学会運営ができるよう務めてまいります。

医師の働き方改革やダイバーシティー&インクルージョンの問題など、医師のライフワークバランスに関心が集まる時代です。手外科学会の発展のためには専門性を高めると同時に間口門戸を広げ、多くの若手医師、特に女性医師に選んでいただける努力が必要と考えております。

酒井理事長を支え手外科学の進歩並びに手外科学会発展のために尽くしてまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。



副理事長 松田 健

新潟大学医歯学総合研究科 形成・再建外科



この度令和6年度日本手外科学会理事を拝命しました、新潟大学形成外科の松田健と申します。本学会の理事は令和4年度に続き2期目となり、本年度より副理事長を拝命しております。日本手外科学会会員の皆様にご挨拶を申し上げますとともに心より感謝申し上げます。私は奈良県出身で、1996年に大阪大学を卒業後、すぐに母校の形成外科に入局しました。大阪では大学病院をはじめ様々な関連施設で研修しました。私がマイクロサージャリーの世界に本格的に足を踏み入れるきっかけとなりましたのは卒後3年目に兵庫医科大学の耳鼻咽喉科へ異動になったことでし

た。なぜ耳鼻咽喉科と思われるかもしれませんが、当時はこちらも形成外科は耳鼻咽喉科内の診療班、現教授の垣淵正男先生と私の2人というような体制でありました。兵庫医科大学では遊離皮弁を用いた頭頸部再建と併行して外傷治療にも多く携わり、手のデグロビング外傷への遊離皮弁や切断指再接着なども経験しました。一般外科研修の後、母校の大学院に進み、端側神経縫合を用いた新たな顔面神経再建法の基礎研究を行い、学位を取得しました。その後2007年よりオーストラリア、メルボルンのBernard O'Brien Instituteへ留学、現地ではProf. Wayne Morrison執刀のWrap-around flapの助手も何度かさせていただくなど、充実した2年間を過ごしました。帰国後もマイクロサージャリーを用いた再建外科や再接着などを中心に診療を続ける傍ら神経移植術・移行術に関する末梢神経の研究も続けていたこともあって前任の柴田実先生にお声掛け頂き新潟に赴任、現在に至ります。皆様の御存知の通り新潟には偉大な手外科の先生方が多くおられ、大変良い勉強をさせていただいております。現在の新潟大学での私の手外科診療は重複母指をはじめとする先天異常や乳癌術後の上肢リンパ浮腫に対する治療を中心としたものとなっております。

本学会では令和4年度から、そして令和6年度からも引き続き専門医試験委員会と学術研究プロジェクト委員会の2委員会の担当理事を拝命しております。専門医試験に関しましては専門医機構のサブスペ認定に向けて、今後の形式変更や改革を進める必要が出てくる可能性があり、例年通りの業務を続けつつも、必要に応じ各方面と連携しながら対応してまいります。学術プロジェクト委員会では従来からの学術研究プロジェクト募集・選定に加えて令和4年度より新設の英語論文賞の取り纏め、並びに令和5年度より公募開始の天児民和賞の新設に携わらせていただきました。どちらの賞も今後の本学会の中心として活躍していただける、若手～中堅の先生方を主な対象としております。引き続き皆様の積極的な応募をお待ちしております。

浅学非才の若輩者ではありますが、日本手外科学会発展のために全身全霊で献身していく所存であります。特に以前よりの課題であります、形成外科領域における手外科への啓発・学会における整形外科医と形成外科医の連携の強化を通してますますの学会の発展を図りたいと考えております。

今後とも会員諸先生方の温かいご支援と、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

理事に就任して

佐藤 和 毅

慶應義塾大学 医学部スポーツ医学総合センター



このたび日本手外科学会理事を拝命しました佐藤和毅です。大変光栄に思うとともに責任の重大さを感じております。浅学非才ではありますが学会、そして会員の皆様のお役に立てるよう尽力する所存です。

私は1989年に慶應義塾大学整形外科学教室入局し、当時の教室主任である矢部裕教授、故内西兼一郎助教授、伊藤恵康先生、佐々木孝先生、堀内行雄先生、その他多くの先輩にご指導頂き、またたくさんの同僚、後輩に支えられ手外科の研鑽を積んで参りました。1992年に本学会に入会、2004年より評議員・代議員、以後、広報委員、専門医試験委員、国際委員、編集委員など多くの委員会での仕事を拝命し、2018-2021年度は監事、2023年には第66回学術集会を開催させて頂きました。

今回、本学会理事として国際委員会を担当させて頂きます。国際委員会の主な事業は、ASSH (アメリカ手外科学会)、KSSH (韓国手外科学会)、TSSH (台湾手外科学会)、HKSSH (香港手外科学会) へのtraveling fellowの選考と派遣、海外からのtraveling fellowの受入れと国内施設の紹介、IFSSH (国際手外科連合) やAPFSSH (アジア太平洋手外科連合) へのdelegate派遣、ASSHと連携しての日米手外科学会開催などであり、これらの活動を通じての海外交流促進と日本手外科学会の国際的プレゼンス向上が最重要課題と認識しております。

私事、2010年にJSSH-ASSH traveling fellowに選出して頂き、およそ1か月間米国内の手外科施設を訪問し、多くの先生方と交流させて頂きました。この時の経験は手外科医として大いに役立っており、医師としての人生の糧になっています。多くの、特に若い先生には積極的にtraveling fellowに挑戦して頂きたいと思います。

最後に、このような機会を与えてくださいました会員の皆様に御礼申し上げます。理事長の酒井昭典先生を支え、理事、代議員の先生方とともに日本手外科学会の発展に尽力致します。会員皆様の温かいご理解とご支援をどうぞよろしくお願い致します。

五 谷 寛 之

公益社団法人日本海員救済会 大阪救済会病院 手外科・外傷マイクロサージャリーセンター



この度、日本手外科学会理事を拝命いたしました大阪救済会病院整形外科・手外科外傷マイクロサージャリーセンターの五谷寛之と申します。

大変光栄でありますとともに重責に身が引き締まる思いでございます。

私は昭和63年に大阪市立大学医学部医学科(現公立大学)を卒業し、同大学整形外科教室(島津晃教授)に入局しました。

腕神経叢損傷の電気生理学的診断や再建で著名であった松田英雄先生(故人)や指尖部切断再接着、血管柄付き腓骨移植やイリザロフ法による下腿再建などOrthoplastic surgeryの先達である第44回本会会長山野慶樹名誉教授(本年7月18日ご逝去)に師事いたしました。日本初の手関節切断再接着を行われた豊島泰先生(故人)にもご指導を受けました。

大学院時代にはマイクロサージャリー技術が必要な実験系の基礎的研究に従事する傍ら、当時は腕神経叢損傷の手術が毎週必ずある時代背景もあり、同分野の手術や電気診断にのめりこんだ時期でもありました。三浪明男会長が開催された手外科学会において、全型腕神経叢損傷に対する助間神経移行術後の手の知覚回復をSEPで評価するという研究で、初めて手外科学会でシンポジストにさせて頂き、論文掲載ができたのも良い思い出です。

その後フランス国立ナンシー大学でMichel Merle、パリのフランス手外科研究所でAlain Gilbert教授に師事し四肢再建の臨床やカダバートレーニング、基礎研究を行い帰国、大学教員として勤務しました。大阪は中小企業が多く、手外傷の患者さんの来院は継続しており、大阪公大や12大学に及ぶ近畿手外科研究会所属の先生方と日々悩みながらも和気あいあいとディスカッションしながら再建手術に従事しています。

日本は急速に人口構成が変化しており、同じ外傷でも日本人は年齢が高齢化して外国人比率が増えており、またその中でも女性の割合も少しずつ上昇しています。そのため労災診療などにも様々な課題があります。私は日本マイクロサージャリー学会の理事長も拝命しており学会間の架け橋になり、このような社会的な問題にも理事の立場から関与できればと思っています。

また、以前機能評価委員長を務めていましたので、酒井理事長から今回担当事務を拝命したと理解しております。以前行っていた患者立脚型評価法の現在地を確認するとともに、変化する新しい国際的な評価法を取り入れていくことも重要な課題と考えています。

我々を取り巻く環境は年々激しさを増しておりますが、手外科医の本邦におけるプレゼンスを少しでも高めるように皆様のご指導を仰ぎつつ、少しでも酒井理事長、日本手外科学会会員の皆様の御役に立てますように尽力する次第です。どうかご指導の程よろしく御願いたします。



服 部 泰 典

JA山口厚生連小郡第一総合病院 整形外科



2024年4月に開催された定時総会において、日本手外科学会理事に選出していただき、ありがとうございました。大変光栄ではありますが、責任の重さを痛感しています。微力ではありますが、日本手外科学会のお役に立てるよう全力を尽くす所存ですので、よろしくお願いいたします。

私は1991年に山口大学医学部を卒業し、直ちに同大学整形外科に入局しました。1995年よりJA山口厚生連小郡第一総合病院に勤務し土井一輝先生の下で、手外科・マイクロサージャリーの研鑽を続けてきました。

1998年から1年間は、台湾のChang Gung Memorial Hospital形成外科にmicrosurgery clinical fellowとして留学し、多くのマイクロサージャリーの臨床経験を積むことができました。帰国後もJA山口厚生連小郡第一総合病院整形外科に勤務し、すでに30年近く同病院で勤務しています。現在は、腕神経叢損傷の機能再建を中心に、手の変形性関節症、絞扼性神経障害などの診療を行っています。

日本手外科学会には1994年に入会し、多くの学会発表を経験させていただきました。2012年から2015年まで教育研修委員会委員(2013年～2015年、委員長)、2015年から2018年まで国際委員会委員(2018年、委員長)を務め、委員会運営についても学ばせていただきました。今回、社会保険等委員会の担当理事を拝命いたしました。私は山口県の労災保険診療委員会の委員を10年以上務めています。この経験を生かして保険診療において手外科が適切に評価されるように努力させていただきます。本格的な高齢化社会の到来、医師の働き方改革の開始など手外科医療を取り巻く環境は大きく変化していますが、手外科の発展のために誠心誠意努力する所存です。会員の皆様におかれましては、今後とも御指導御鞭撻の程、宜しく願い申し上げます。

池 口 良 輔

国立大学法人 京都大学医学部附属病院 リハビリテーション科



この度、日本手外科学会理事を拝命いたしました京都大学リハビリテーション科の池口良輔と申します。2期目となります。日本手外科学会会員の皆様に、僭越ではございますが、ご挨拶申し上げます。

私は1993年に京都大学を卒業後、京都大学整形外科に入局し、手の外科、マイクロサージャリー、外傷外科を専門として参りました。1995年に日本手外科学会に入会し、2007年に手外科専門医を取得し、2018年からは代議員を拝命いたしました。日本手外科学会に入会してから29年になり、これまで手外科について勉強させていただいた分、これからは理事として

学会の発展に尽力したいと思っております。2018年から編集委員会委員を務め、2020年からは編集用語委員会委員長を拝命し、前任の面川庄平前担当理事とも協力して、日本手外科学会雑誌の発刊だけでなく総説の開始にも携わってきました。2022年から理事を拝命し、1期目は、編集用語委員会を担当して、編集用語委員長としての経験をもとに手外科学会雑誌の発刊と手外科用語集の改訂に取り組んでまいりました。

2期目は、編集用語委員会に加えて、情報システム委員会の担当理事を拝命いたしました。

情報システム委員会は、会員情報管理や施設管理を行い、日本手外科学会のホームページでマイページでのオンライン決済など、会員の皆様が使いやすくなるシステムの構築を目的としています。会員情報管理のシステムは完成し、今年度は施設管理のシステムを構築予定です。会員の皆様にとって、各種申請などの手続きが円滑に進むように取り組んでまいりたいと思います。

編集用語委員会のほうは、2024年春から投稿システムがEditorial Managerへ変更になりました。従来の投稿システムより投稿しやすくなり、また日本手外科学会の経費削減にも貢献しておりますので、これを機会に論文投稿をお願いします。2024年の学術集会発表論文に加えて、Proceedingsも開始になりました。これは、従来の学術集会発表論文に投稿した内容を、英文論文として英文誌にも投稿すると厳密には二重投稿となるため、Proceedingsという形も受け付けて、会員の先生方が国際的に活躍できるように英文論文投稿を推進しようというものです。英文誌への投稿を予定している内容であれば、日本手外科学会誌のほうはproceedingsに投稿していただき、英文にまとめていただければと思います。土田真嗣委員長、小田良アドバイザーをはじめとする編集委員の先生方と協力して、査読を円滑に行い、良質な学会誌の発刊を続けていきたいと思っております。代議員の先生方におかれましては、ご多忙の中恐縮ですが、査読業務に関してご協力賜りますよう、宜しく願い申し上げます。今後も手外科学会雑誌の質の向上と手外科用語集の改訂に取り組んで行きたいと思っております。

酒井昭典理事長のもと、理事、代議員の先生方とともに、伝統ある日本手外科学会の発展に尽力していきたいと思っております。会員の皆様におかれましては、今後とも御指導御鞭撻賜りますよう宜しく願い申し上げます。

.....

川 崎 恵 吉

昭和大学横浜市北部病院 整形外科



この度日本手外科学会理事に拝命いたしました、昭和大学横浜市北部病院整形外科の川崎恵吉と申します。僭越ながらご挨拶申し上げます。私は1991年に故 藤巻悦夫教授の昭和大学医学部整形外科に入局し、同時に大学院に進学し、bone morphogenetic protein (BMP)の研究で博士号を取得、その後は整形外科・手外科の臨床に明け暮れていました。1995年から関東通信病院(現NTT東日本関東病院)にて元日手会理事長の落合直之先生のもとで腕神経叢麻痺や末梢神経を中心に指導を受け、1998年から熊本機能病院手外科の中島英親先生にマイクロサージャリーを中心に指導を受けました。2014年にはスイス・ドイツ・オーストリアのヨーロッパ3カ国に1年間留学し、各国の臨床の現場で、橈骨遠位端骨折、舟状骨偽関節、母指CM関節症をはじめとした数多くの難治性疾患に対する治療の見聞を広めました。海外学会に関しては、コロナ前までは7年連続FESSHで発表し、2023年からは2年連続AAOSで口演発表を行いました。これまで橈骨遠位端骨折ではPolyaxial Locking Plate (PLP)、Double-tiered Subchondral Support (DSS) 法、掌側プレート固定術後掌側亜脱臼、関節辺縁骨折(marginal volar rim 骨折)、舟状骨偽関節では血管柄付き骨移植、Scaphoid Locking Plate、母指CM関節症ではHybrid suspensionplastyなど、新しいテーマを常に発信し続け、時に議論となることもありましたが、より良いものを目指して治療を行ってきました。今後も日手会に新しいものを取り入れていきたい、と思っております。

現在、昭和大学横浜市北部病院の副院長と整形外科教授・診療科長として手外科の診療とその普及に努めております。また当教室の藤巻悦夫、稲垣克記が主催した第42、61回の日本手外科学会学術集会の運営にも携わることも出来ました。日手会の委員会に関しては、橈骨遠位端骨折の診療ガイドライン策定委員会、教育研修委員会(委員長)、Hand Now運用委員会、国際委員会に携わり、今回定款等検討委員会の担当理事を拝命いたしました。現在日手会では様々な問題を抱えており、新入会員数、サブスペシャリティ領域の専門医認定、一般市民や他科の医師への手外科の普及、などの早急な対応が求められています。酒井昭典理事長や他の理事の先生方とともに、この伝統ある手外科学会のさらなる発展を目指し、若い世代の手外科医の先生方にも魅力のあるものとなるよう、今後も邁進してまいりたいと思っております。会員の皆様におかれましては、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



森 谷 浩 治

一般財団法人 新潟手の外科研究所



この度、日本手外科学会理事を拝命いたしました一般財団法人 新潟手の外科研究所の森谷浩治です。日本手外科学会の会員の皆様に、謹んでご挨拶を申し上げます。私は1995年に新潟大学を卒業し、新潟大学整形外科科学教室に入局いたしました。2000年7月に本学会に入会させていただきましたが、入会前より新潟大学手の外科班に属し、斎藤英彦先生ならびに吉津孝衛先生から、手外科の指導を頂戴いたしました。2008年から新潟手の外科研究所で牧 裕先生や坪川直人先生と一緒に手外科診療および研究、全国からの研修希望者に対する教育に従事しております。2009年に手外科専門医を取得し、2013年にはガイドライン策定委員に選出していただきました。この橈骨遠位端骨折診療ガイドライン改訂第2版に携わった経験は手外科医として大変貴重なものになりました。2014年からは代議員を拝命し、2015年にはオンラインジャーナル別冊運用委員会 Junior Editor、2018年より医療機器開発・管理運用委員や編集委員、2020年から2024年までは学術研究プロジェクト委員として本学会の大切な業務に携わらせていただけました。以上の少ない経験にはなりますが、それらをいかして日本手外科学会の益々の発展に寄与できるよう努める所存でございます。会員の皆様におかれましては、何卒御指導・御鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

現在、私は新潟手の外科研究所に勤務しておりますが、そこでの診療や研究、教育の経験から、国内のみならず世界に向けて積極的に発信することの重要性を強く認識しております。また、全国から形成外科や整形外科といった所属科、そして性別に関係なく研修にこられているたくさんの先生から刺激を受け、手外科診療や日本手外科学会における多様性の重要性も実感しています。この度、私を日本手外科学会の理事にお選びいただきましたことに報いるべく、本学会の更なる国際的立ち位置の向上や多様性を有した本学会の活性化に少しでも寄与させていただきたく存じます。また、長年の懸案事項であります一般社団法人 日本専門医機構に認められた専門医を目指す、より柔軟かつ多様な手外科教育システムの構築に微力ですが尽力して参りたいと思っております。

最後になりますが、酒井昭典理事長よりご指名いただきました教育研修・オンラインマガジン運用委員会および橈骨遠位端骨折診療ガイドライン策定委員会の担当としての職務を誠心誠意遂行していく所存でございます。今後とも、これまで以上によりよろしくお願い申し上げます。これをもちまして理事就任のご挨拶に代えさせていただきます。

鳥谷部 莊 八

独立行政法人国立病院機構 仙台医療センター・東北ハンドサージャリーセンター 形成外科・手外科



この度、日本手外科学会新理事就任の運びになりました鳥谷部莊八と申します。このような重要な役割を任せていただき、大変光栄に存じますとともに、その責任の重さを痛感しております。

私は1995年秋田大学医学部を卒業後、平鹿総合病院(秋田県横手市)にて3年間の研修、その後1998年に東北大学形成外科に入局いたしました。形成外科専門医取得前まではオールラウンドな形成外科医を目指して、あらゆる分野を経験し、特に唇裂・口蓋裂に興味を持って取り組んでおりました。関連病院で研修している間に多くの切断指再接着を経験し、マイクロサージャリーに多くの時間を割いていたところ、恩師である山田敦元教授より、手の外科班のトップになるように命じられました。私としては青天の霹靂とも言える人事でしたが、「与えられた仕事を愉しむ」をモットーにしていたので、どんどん手の外科分野にのめり込んでゆきました。

日手会(当時は日本手の外科学会)入会は2004年で、形成外科専門医取得後しばらくしてからのことで、出遅れ感は否めない状況でした。東北大時代は手足の先天異常、手指の皮弁、切断指を始め多くの外傷、再建マイクロサージャリーを専門に診療し、2010年に手外科専門医に合格、代議員就任、仙台医療センター形成外科の責任者として現在に至っております。

日手会では代議員として先天異常委員、教育研修委員、社会保険等委員、用語委員、選挙管理委員などたくさんの役割を担当させていただき、非常に多くのことを学ばさせていただきました。これからは先天異常委員会、倫理利益相反委員会の担当理事として、各委員と緊密に連携し、学会に貢献する所存です。

私にはプレーヤーとしての役割もありますが、最近はマネージャーとしての役割も多くなってきました。若手外科医が活躍できるような環境づくりや教育の充実が私にとって非常に大切な仕事であると思っております。その一環として書籍の執筆や講演などを行い、手外科医の裾野を広げる活動を行って参りました。今後はなお一層、若手教育に注力し、誰もが活躍できる開かれた学会となるように努力して参ります。

学会の活動は、理事一人の力で成し遂げられるものではありません。会員の皆様一人ひとりのご協力があって初めて、学会の発展が可能となります。皆様からのご意見やご要望を真摯に受け止め、より良い学会づくりに取り組んでまいりますので、どうぞご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びにあたり、再度この度の就任に際しまして、重ねて御礼申し上げます。整形外科医も形成外科医も分け隔てなく、誰もが入ってよかった、行ってよかった、楽しくためになる学会になることを願って活動して参ります。今後とも、皆様と共に学会の発展に努めてまいりますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

原 友 紀

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター病院 整形外科



日本手外科学会におけるダイバーシティ・インクルージョン推進のために、一女性代議員として理事に立候補しました。理事就任をご承認頂き、社員の皆様に感謝申し上げるとともにその名に恥じぬ働きをする決意しております。

私は山口大学医学部を卒業したのち、筑波大学整形外科に入局、研修・大学院を経たのち筑波大学の講師として手外科・末梢神経外科の診療および研究を行って参りました。近年は手外科の中でも腱移行術に魅了され、

臨床も研究も腱移行術をテーマとするために現在の職場：国立精神・神経医療研究センターに入職しました。「オチアイズム」全開で尊敬する恩師：落合直之教授の背中を追っていますが、地元岡山で高校生の時に知ったハンセン病患者の治療：橋爪長三先生の生き方にも憧れがあり、今は様々な神経難病の手の再建に取り組んでいます。手の痙縮・変形で手すりを把握できないために歩けなくなる患者が存在します。手の治療は生命予後に影響することもあることを実感し、日々診療しております。

2012年に代議員になってから編集委員会、用語委員会、広報渉外委員会、キャリアアップ委員会で活動し、委員長も務めさせて頂きました。今年度、キャリアアップ委員会および手外科専門医制度検討委員会の担当理事を拝命致しました。

社会が持続可能性を意識して活動することを求めている現代において、本学会の存続と発展のためには、SDGsのような目標を設定し、戦略的に活動していくことが重要ではないかと考えております。変わりゆく時代の流れに合わせ、社員の意識改革が必要であり、多様な人材を育成し、誰もが活躍できる環境を整える必要があると考えています。キャリアアップ委員会は歴代の担当理事の実行力により本学会に種々の新風を吹き込みました。手外科専門医偏在の問題、働き方改革、女性の活躍において残る課題を委員の皆様と一緒に精力的に解決していきたいと考えております。

手外科専門医制度検討委員会は、手外科専門医が日本専門医機構サブスペシャルティ領域専門医制度に承認されることを目指し設置されたテンポラリーな委員会ですが、その目的を果たすまで初心を貫いて活動したいと考えています。「手外科の優位性の実証とその啓蒙」が取り組むべき課題であり、この仕事にご尽力されてきた多くの先生方および本学会の悲願の達成に貢献したいと考えております。

佐竹 寛 史

国立大学法人 山形大学医学部附属病院 整形外科



私は1999年に山形大学医学部医学科を卒業し、2000年に橈骨遠位端骨折に対するcondylar stabilizing法を開発した清重佳郎先生のもとで、ロッキングプレート固定の開発時期に研修を行いました。2003年に函館勤務となり、荻野利彦前山形大学教授と北大時代同期の村松郁夫先生に手外科の手術を教わりました。その後大学院に進学し、2007年に軟骨に発現する転写因子を発見し、学位を取得しました。2007年から1年間、形成外科の柏英雄先生のもとで各種皮弁、マイクロサージャリーの研修を行いました。2008年に大学に戻り、荻野先生、高原政利前山形大学准教授のもとで手、肘関節外科、スポーツ傷害、および先天異常を中心とした研修を行いました。荻野先生と高原先生の外来には特別にシュライバーとして隣に座らせていただき、患者さんの診察法、診断のプロセス、治療法の選択肢、およびインフォームドコンセントの取り方を学ばせていただきました。手術に関しては荻野先生の先天異常を中心とした手術を見て、手術記録を書き、録画をして繰り返し学びました。高原先生は一度見せた手術は次からは執刀させるという方針で、手術の腕を磨いていきました。2009年に荻野先生からの提案で台湾のChang Gung Memorial Hospitalに留学し、形成外科グループでお世話になりました。その当時形成外科グループでは、月の手術件数が1200件、年間15000件ほど行われ、非常に濃密な研修をさせていただきました。荻野先生は退職後も山形、仙台、福島で先天異常の手術を継続され、その手術には毎回呼びいただき、助手を務めさせていただきました。この経験が私の手外科診療における診断力と治療力向上に繋がっていきました。

荻野先生の退職に伴い、36歳の時に山形大学整形外科手外科診療班のチーフになりました。初めて執刀する手術がたくさんありましたが、助手で入った手術も手術記録を残し、上級医の手術はほとんど録画しておりましたので、それを見直しながら、手術に臨みました。2016年には胸郭出口症候群(TOS)の高校生と出会い、それまで経験のない手術でしたが、内視鏡補助下第1肋骨切除術を初めて行い患者さんが寛解したことから、TOSの研究、診断、および治療が現在のライフワークになっております。

後輩育成のために学生、研修医、専攻医を対象にしたマイクロサージャリーや手術手技講習会を定期的に開催してきました。また、山形手外科セミナーを開催し、毎年テーマを決めて山形大学関連病院の症例を集め、その成績を報告してきました。清重先生から教わった橈骨遠位端骨折に対するロッキングプレート固定は後輩達や手外科医だけではなく先輩達にも広く伝承され、2000例を超える手術症例で長母指屈筋腱断裂が今まで1例も生じていないことは誇りです。

学外活動としては、野球肘検診やテニス検診活動を行っております。学会活動としては日本手外科学会、肘関節学会、小児整形外科学会、骨折治療学会、末梢神経学会を中心に、学会発表、論文投稿、査読、各種委員会での活動を行っております。また、医局長を3年間務め、同門会員との連携、教室員と組織を運営していくノウハウを学んできました。

これからも先人の遺志を受け継ぎ、若い人材を育成しながら、臨床、教育、研究面から手外科分野の発展に貢献できればと願っております。よろしくお願い申し上げます。

橋 本 一 郎

徳島大学大学院



この度、伝統ある本学会の理事を拝命いたしました橋本一郎です。日本手外科学会の会員みなさまに謹んでご挨拶を申し上げます。日本手外科学会理事は初めてとなりますが、形成外科関係での理事・役員の経験を活かしてお役に立ちたいと思いますし、本学会理事会に参加できることを楽しみにしております。

今年度は専門医資格認定・施設認定委員会と将来展望戦略委員会の担当理事となりました。専門医資格認定・施設認定委員会では、河野正明先生に委員長になっていただき、判定基準等に統一性が必要であるために中尾悦宏先生や長谷川健二郎先生などの歴代の委員長にアドバイザーになっていただきました。また、将来展望戦略委員会では、山本真一委員長やアドバイザーである平田仁先生と篠原孝明先生のご指導により、これまでの手外科学会に関する一般の認知度向上という方針が引き続き行われることになります。どちらの委員会も重要な案件について検討するものであり、身の引き締まる思いです。

私の本学会における最初の委員会活動は2014年からの先天異常委員会からでした。委員会では委員長の射場浩介先生とアドバイザーの堀井恵美子先生をはじめ委員の先生方から、先天異常に関する多くのことを学ばせていただきました。2016年からは先天異常委員会委員長を2期に渡り拝命し、川端秀彦先生にアドバイザーになっていただきご指導いただきました。この間、委員会企画として毎年の学術集会では会長にご配慮をいただき「手の先天異常懇話会」を開催することで、多くの素晴らしい講演を拝聴する機会にも恵まれました。2020年からは専門医試験委員会の委員を山崎宏委員長と内藤聖人委員長のもとで2期勤め、委員の試験問題作成に対する真摯な姿勢や試験問題を通して手外科全般について学ぶことができました。

私は形成外科医であり、特にマイクロサージャリーを専門としてきました。本学会において形成外科からの会員数が増えることを心から願っておりますし、その努力を惜しみません。これからも、専門医機構によるサブスペシャリティー認定や専門医と指導医育成など、本学会にとって重要なミッションに取り組む必要があると認識しております。酒井昭典理事長のもとで学会が目指す目標の実現に向けて協力し努力する所存です。会員皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。



山 本 美知郎

名古屋大学医学部附属病院 手の外科



この度、日本手外科学会理事を拝命しました名古屋大学人間拡張・手の外科学の山本美知郎と申します。紙面を借りて日本手外科学会会員の皆様にご挨拶申し上げます。本学会は手外科領域において米国に次いで歴史のある学会と認識しています。これまでに偉大な先人たちが世界に先駆けて業績を積み上げてきた本学会の重責を担う立場となり身の引き締まる思いです。

私は1998年に旭川医科大学を卒業し、名古屋掖済会病院で初期研修を行い名古屋大学整形外科に入局しました。木野義武先生に外傷治療の基礎を教えて頂き、名古屋大学の関連施設での研修を経て2005年に名古屋大学手の外科の大学院に入学し、初めの1年間は中日病院整形外科・名古屋手外科センターで中村蓼吾先生と2人常勤の体制でご指導頂きました。2006年以降は平田仁先生のもとで大学での研究と診療に従事し現在に至っています。この間、手外科の診療内容が時代と共に大きく変化していることを実感しています。勤務している病院の特徴も大きいのですが、外傷治療以外に上肢の変性疾患が増加していると感じています。超高齢社会を迎えている日本において、加齢とともに増加する上肢の疾患に関する研究や技術の開発が必要です。学会員の皆様ともいろんな場面でこの点を議論していきたいと思います。

2016年に1年間ミシガン大学でKevin C Chung先生のもとに留学し、アウトカム研究や費用効用解析など社会の中の手外科についても考える時間を得ました。手外科医は目の前の患者を如何に良くするかばかり考えがちです。もちろんそこは最も重要なことですが、手外科が社会の中で認知されるような取り組みも必要です。学会の中では手外科専門医検討委員会の先生方もこの点について議論を深めています。私も名古屋大学の教室員とともに産学官民の共創や医工連携などを通じて異分野の方々の力も借りて手外科の発展に貢献したいと思っています。このたび専門医制度委員会担当理事を拝命しており、日本専門医機構のサブスペシャリティーに手外科が認定されるよう努力してまいります。

新しく理事長に就任された酒井昭典先生および理事、代議員の先生方と共に日本手外科学会の更なる発展に尽力する所存です。会員の皆様には、今後ともなお一層のご指導とご支援の程、宜しくお願い申し上げます。

新名誉会員のご挨拶

日本手外科学会名誉会員に推挙されて

田 中 克 己

重工記念長崎病院形成外科



この度は伝統ある日本手外科学会の名誉会員にご推挙戴きまして、誠にありがとうございました。たいへん光栄に存じます。私は1984年に卒業後、ただちに故 難波雄哉先生の主宰する長崎大学病院形成外科に入局致しました。当時、形成外科は整形外科教室から診療科として独立して5年目の頃で、大学ならびに関連施設では、先天異常、外傷・熱傷、瘢痕拘縮をはじめとした手外科関連の疾患を多数診療していました。研修医でありましたが、すぐに手外科の魅力に取りつかれ、2年間の研修終了時の1986年に本会に入会をいたしました。手外科は機能と整容を追求する究極の外科であり、形成外科医としての自らが目指す方向と一致しており、現在に至っております。そのため、形成外科に入ってこられた若い先生方には、ことあるごとに手外科の面白さと大切さを伝えています。

2008年から2024年まで評議員・代議員の任期を務めさせていただきましたが、その間、2012年4月からの2年間は落合直之理事長のもとで、また、2016年4月からは矢島弘嗣理事長のもとで2年間、理事・副理事長の任に与りました。2022年4月から本年までは監事として、学会事業全体と理事会運営を監査する立場となりました。学会の運営を直接学ぶことができましたのも、歴代の理事長をはじめ関係各位のおかげと感謝申し上げる次第です。理事、評議員・代議員としては、主に専門医関係の業務が中心でした。なかでも歴代の理事長・理事会のもとで推し進められてきた手外科専門医制度が、落合理事長のもとで、当時の日本専門医制評価・認定機構（専認構）に認められたことは、たいへん素晴らしいことでした。その後、制度の初回更新を目前にして専認構は新たな日本専門医機構に移行することになりました。このことにより、新たなサブスペシャリティ領域としての制度設計が求められ、現在に至っていることはご存じの通りであります。現在も関わっていますが、すでに関係各位のお力で機構に整備基準等を提出している段階ですので、近い時期に必ずや良い知らせが届くものと固く信じております。2021年4月には、長崎市で第64回日本手外科学会学術集会を開催することができました。いまだCOVID-19の収束には至っていない中でしたが、平田理事長はじめ理事会のご指導を仰ぎながら、また、会員の皆様の強力なサポートを戴き、ハイブリッドながらも冷や汗の中での現地開催をすることができました。今となっては良き思い出となっております。

入会後、約40年が経ちましたが、手外科学会からは学究的な面ばかりでなく、多くの先生方からのご指導や交流を通して、手外科医として、また、医療人として有意義な時間を過ごし、同時に多くの知己を得ることもできました。これからも手外科の大切さ、楽しさ、そして難しさも伝えることが使命と思っています。手外科がこれまで以上に多くの方々の幸福に繋がり、併せて日本手外科学会が益々発展することを願い、名誉会員のご推挙に対する御礼のご挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。

坪 川 直 人

一般財団法人 新潟手の外科研究所



この度は、栄えある日本手外科学会名誉会員に御推挙頂き身に余る光栄に存じます。これも会員皆様の御援助あつてのことと厚く御礼申し上げます。

新潟大学整形外科教室に入局時は田島達也教授の全盛期でしたが、私は難しい話を討論する手の外科から距離を置き、脊椎班や下肢班の先生方に指導してもらっておりました。関連病院での研修を終え、帰学し脊椎外科を専門にすると決めておりましたが、最後の研修病院で出張にいらして

いた斎藤英彦先生に手の外科の重要性、面白さを熱くお話していただき、帰学2週間前に手の外科班に入りました。短い大学の研修を終えてすぐに佐渡勤務を申し渡され、1年余りで佐渡から当時手の外科研究所があった市中病院に勤務を許されました。手の外科に誘っていただいた斎藤先生は大学から浜松聖隷病院に移動されておりました。当時新潟手の外科研究所には田島達也先生をはじめ吉津孝衛先生、牧裕先生がおられ、下肢外傷をやりながら手の外科研修をさせていただきました。2年余りの研修ののち田島先生のご厚意により米国SyracuseのPalmer先生のもとへ留学しました。Syracuseでは手関節鏡を教えて頂き、このことが私の手の外科の転機となりました。SyracuseからSt. LouisのMansky先生、Mayo ClinicのCooney先生、Berger先生、Indiana hand centerのSteichen先生を訪問する機会を得て米国の手外科の現況を肌で感じることができました。その後帰国し燕労災病院整形外科部長として赴任し、手外科を中心としたなんでもできる整形外科医を目指しておりましたが、吉津先生、牧先生から熱心なお誘いいただき1997年から新潟手の外科研究所のスタッフとして勤務しました。このように私の手外科医としての歴史は新潟大学の諸先輩の先生をはじめ、北海道大学三浪教授、弘前大学藤教授、兵庫医大田中教授など他大学の先生の教えも大きく影響しております。手外科の様々な分野での学会発表、論文作成を行いました。

日本手外科学会では、用語委員、教育研修委員を拝命し、また編集委員会担当理事として雑誌の電子化を進めてまいりました。転機として2020年4月に第63回日本手外科学会学術集会の会長を仰せつかり、海外招待講演、特別講演、を含め一般公演、ポスターなどすべての準備を進めておりました。しかしCOVID-19の世界的流行と非常事態宣言で、日本整形外科学会学術総会とともに現地開催は中止、右も左もわからないWEB開催となりました。日本手外科学会も混乱に陥り、私も心がコロナ感染したようで落ち込みました。しかし会員の皆様の多大なるご協力により、形なりにも成功し、無事黒字会計で終了しました。黒字分をすべて学会にお返し、一部を東日本、中部、九州手外科研修会への寄付していただくようお願いしました。今後も日本手外科学会がサブスペシャリティとして認められ益々発展されていくことに、少しでもお力になればと思っています。

新特別会員のご挨拶

日本手外科学会特別会員に推戴されて

柿 木 良 介

近畿大学 整形外科 教授



この度は、名誉ある日本手外科学会特別会員にご推挙いただきまして誠にありがとうございました。私は高知医科大学の1期生で、卒業と同時に京都大学医学部整形外科教室に入局いたしました。当時助教授でおられました上羽康夫先生の奥様が高知ご出身ということもあり、大変大事にして頂きました。一番最初は入局前に遡ります。京都大学整形外科の入局面接試験の場所がわからず、広い京大病院をうろうろしていたところ、たまたまお声をかけてお尋ねしたのが上羽先生でした。「君はどこの大学から来たの?」とご質問があり、「高知医大です」と答えると、「ああ、柿木君」とおっしゃって頂き、右も左もわからない地で本当に救われた気持ちになりました。また最初に研修医として手外科の手術に入らせて頂いたのが、上羽先生のtoe to thumb transferで、何もわからないながら大変印象に残った手術でした。あの手術のあの印象が私を手外科に導いたと言っても過言ではありません。1年間の京都大学研修ののちに、滋賀の病院に赴任いたしました。そこでの上司が西島直城先生でした。腕神経叢手術、腱移行、筋肉移行、顕微鏡手術、本当に沢山の手術を教えて頂きました。2年後舞鶴市民病院に赴任しました。当時舞鶴には、ベニア板工場、板ガラス工場が24時間創業をしており、指外傷の宝庫でした。断端形成から指尖形成と進めていき、脳外科の顕微鏡を使わせて頂いて、手術書片手に再接着にも挑戦し、赴任して1年後、初めて示指再接着に成功した時の嬉しさはいまだに覚えています。

その後京都大学大学院に進み、神経再生の研究をさせて頂きました。「何か外科医でしかできない手術手技を用いた実験系を作らないと、理学部、農学部系の人には勝てない」と理念のもと、ラット後肢から筋皮弁を作成するモデルを開発し、それを神経再生に応用し、学位論文にすることができました。このモデルは、その後も京都大学大学院生の間で頻用され、沢山の論文のネタとなりました。大学院生の時には、ユタ大学のGraham Lister教授、Singapore National大学Robert Pho先生のところに短期留学させて頂いて、free flapを使った四肢再建を勉強させて頂きました。大学院卒業後は縁あってMayo ClinicのAllen Bishop先生のところに留学しました。留学した途端in situ hybridization、PCRをするように言われ、大変面食らいました。「分子生物学はどうマイクロサージャリーと関係するのか?」とずっと違和感を持って研究生生活を送っていましたが、この分子生物学との接点が、その後の私の研究生生活にとって大きなbenefitとなりました。

米国留学中、台湾のChang Gung Memorial HospitalのYuan-kun Tu先生にお会いしました。彼は沢山のfree flapをしており、米国留学後Tu先生のもとで1ヶ月間flapの勉強をさせて頂きました。あの頃1日おきに毎日2例のfree flapがあり、大変勉強になりました。

帰国後、兵庫県の日本海側の病院に赴任しましたが、そこでも再接着、血管柄付遊離皮弁術、偽関節や化膿性関節炎に対する血管柄付骨移植、大腿骨頭壊死に対する遊離腓骨移植など沢山の手術、flap手術を経験させて頂きました。2年後京都大学にいきなり手外科チーフとして帰学するように言われました。何か自分の特性を出さないと思い「なんでも血管柄付組織移植で治す」というモットーで日常診療を進めました。大学院生の研究指導では、Mayo Clinicで学ばせて頂いた分子生物学が大変役立ちました。また現京都大学iPSセンター戸口田淳也教授には、本当にたくさんマイクロサージャリーを用いた腫瘍再建の機会を頂き、深く感謝致しております。

2014年から近畿大学整形外科に移りましたが、人手不足で大変苦労しました。腕神経叢double free muscle手術を研修医をいれた3名で行ったり、free flapも2名ですることが多くなりました。手術となるとstaffが2〜3名、それに大学院生が4〜5名ついてくれる京都大学の環境とは大きく異なり、あまりのストレスで全身に蕁麻疹ができて困ったことがありました。私立大学は開業する先生も多く、また折角研究生生活を続けたいと思っても、ご家庭の事情（親御様の高齢化、病気など）で大学を去っていく、さらざるを得ない先生も多くおられました。残念の一言です。

大学病院での生活が長かったため、国内外多くの恩師、友人ができました。外国人では、Mayo ClinicのAllen Bishop先生、Alexander Shin先生、Stanford大学James Chang先生、Jeffery Yao先生、台湾E-DA病院のYuan-kun Tu先生、ボストン大学教授で現在South Carolinaで開業しているScott Duncan先生、UCLAのNiel Ford Jonesの先生、Cleveland clinicのWilliam Seitz先生などがおられます。これらの先生方の友情には深く感謝いたします。

最近の日本の医療では、何かというと利益が優先されているように思われます。大学病院ですらその傾向が強く、まるで市民病院かと思われるような光景も見受けられます。脊椎に何本もスクリューを入れてロッドで締結し、その数年後には隣接椎間障害を起し、また固定範囲を延長する脊椎外科は、本当に病院経営には貢献しています。またsurgical assisting devicesの発達で、私が脊椎外科をしていた頃から比べると、本当に安全に脊椎外科ができるようになりました。日本手外科学会は、手外科専門医制度を専門医認定機構から認定を受けようと、ずいぶん昔に専門医制度を確立し、長年頑張ってきました。しかし昨年、後からできた脊椎外科専門医に先を越され、脊椎外科専門医は日本専門医機構認定専門医として認定され、手外科専門医は未だ日本手外科学会認定専門医に留まっています。しかし時代がどうであれ、組織を丁寧に扱うという手外科の技術は全ての外科医に必要な技術です。日本手外科学会の皆さん、ぜひ先人が作られた手外科の基本手技を忠実にマスターし、そこに最新の技術を融合させて手外科に新天地を切り開いてください。私は、手の外科の絶頂期に上羽先生はじめ先輩諸氏から手外科を受け継ぎました。そして下火になって次世代の先生にお渡しするのは本当に情けなく、心苦しく、申し訳なく思っています。頑張ってください。

日本手外科学会特別会員に推挙されて

亀 井 讓

名古屋大学形成外科学 名誉教授



この度は、日本手外科学会特別会員にご推挙いただきまして誠にありがとうございます。身に余る光栄なことで、会員の皆様に厚くお礼申し上げます。私は、昭和59年3月に名古屋大学医学部を卒業し、厚生連加茂病院で研修した後、同病院外科、昭和63年12月より静岡済生会総合病院外科で研修を行いました。その後、平成元年7月に名古屋大学形成外科に入局させていただきました。そして平成5年4月より愛知医科大学形成外科助手、平成6年7月愛知医科大学形成外科講師となり、平成6年9月から岐

阜県立多治見病院初代形成外科科長として赴任しました。平成10年4月には名古屋大学形成外科講師として帰局し、平成12年3月同大学助教授、平成19年4月同大学准教授を経て平成21年8月名古屋大学形成外科教授に就任しました。

名古屋大学形成外科は前任の鳥居名誉教授が整形外科出身であったことから、整形外科領域、特に手足の先天異常、四肢の悪性腫瘍、外傷後の骨髄炎などの症例が多く、それらの治療に多く携わることができました。他にも頭頸部癌切除後の再建や、骨髄炎、放射線潰瘍などの難治性潰瘍といった、大学ならではの難症例が多く、皮弁を利用した再建、特にマイクロサージャリーによる遊離皮弁移植が、研究を含めて私のライフワークとなりました。

平成24年度から、日本手外科学会の理事となり、平成30年からは副理事長として2年間、手外科学会の運営に携わる機会を得ました。この時期は、新しい専門医機構により基本診療科の専門医制度が確立され、サブスペシャリティーの専門医制度が確立されつつある時期でした。本学会を整形外科学会と形成外科学会の両学会の上に立つ二階建ての学会として認められれば、専門医機構のもと、専門医制度を確立させることができると思い、本学会における専門医制度の確立や、そのための研修体制の確立などの基礎体制づくりのお役に立てたことは、私の宝物として残っています。

最後に日本手外科学会がいつそう発展し、皆様が益々ご活躍されることを祈念して、特別会員推挙のお礼の挨拶とさせていただきます。

日本手外科学会特別会員に就任して

渡 邊 健太郎

愛知淑徳大学



この度、伝統ある日本手外科学会の特別会員に選出していただきましたことに心より感謝を申し上げます。私は1983年に名古屋大学医学部を卒業し、関連病院である名古屋掖済会病院で初期研修を行いました。整形外科をローテーションした際に手外科という分野があることを初めて知り、主任部長の木野義武先生の緻密で流れるような手術手技に魅了されました。翌年9月から整形外科専攻医として木野先生に師事し、2年10か月にわたって切断指を含む重度手外傷の初期治療と再建術について基礎から応用まで学びました。木野先生の教えを端的に言うならばdo your bestではなくdo THE bestであり、それは最高の結果を得るために決して妥協しないという確固たる信念です。さらに木野先生からは、どのような症例も常に学会発表することを念頭に治療にあたる心構えを訓えられました。また学会発表する前に論文を書き上げることも教わったことの一つであり、現在に至るまで遵守しております。この時の経験がその後の私の手外科医としての礎となりました。

卒後4年で指・前腕の再接着を含め外傷についてはひと通りの知識・技術と経験を身に付けましたが、それでは手外科医としては不十分と考え、また入局した名古屋大学整形外科教室手の外科班の中村蓼吾助教授からの誘いもあって1989年に名古屋大学附属病院分院の医員（副手相当）となりました。分院では三浦隆行教授に先天異常手の治療を、中村先生からは当時まだ不明な点が多かった手関節障害について多くを学び、Kienbock病に対する橈骨骨切り術のバイオメカニクスに関する研究が学位論文となりました。また国内に少なかった手関節鏡によるTFC治療を多く手掛けることができました。約3年間の分院勤務ののち関連病院に移りましたが、2002年に木野先生の後任部長として名古屋掖済会病院に再度赴任しました。それまではどの病院でも下っ端の立場で気楽でしたが、いきなり10数名の医員の指導と病院経営に関与する立場となり多忙な日々を送ることになりました。それでもその中で手外科領域の主要ないくつかのテーマに関する論文を国際誌に掲載することができました。2020年に現在の愛知淑徳大学に移り、学生教育の傍ら附属するクリニックで外来診療と小手術を続けております。

本学会では1999年に評議員（2010年より代議員）となり、2008年に倫理委員会の委員長を3年間務めました。また2012年から理事を2期4年務めさせていただきました。その間いくつかの委員会を担当しましたが、社会保険等委員会で私が提案した骨折経皮的鋼線刺入固定術の指ごとの算定が厚労省に認められたこと、用語委員会で用語集改訂第5版を電子版にしたこと、橈骨遠位端骨折診療ガイドライン策定委員会で改訂第2版を上梓したことが印象に残っています。

振り返りますと私の歩んできた手外科医の道は「アイウエオ」でありました。私を信頼してくださったすべての患者さんの愛（アイ）から運（ウン）をいただき、多くの縁（エン）によって育てられ、今はこれまで私を支えてくださった皆様の恩（オン）に感謝するばかりです。勤務医の50年間は10年ごとになすべきことが変わると思います。それは自己研鑽、人格涵養、後進育成、組織貢献、社会貢献であり、私は40年間そのように努めてまいりました。65歳となり今後の10年はできる限り地域社会に貢献したいと考えております。最後になりますが、本学会および会員皆様の益々の発展を祈念して就任のご挨拶とさせていただきます。

物故会員への追悼文

故 茨木邦夫名誉教授を偲んで

富永草野病院 金 谷 文 則



茨木 邦夫 教授

2023年11月26日に茨木邦夫教授が永眠されました(享年89歳)。先生のご逝去を悼み、謹んでお悔やみ申し上げます。

茨木先生は新潟大学昭和37(1962)年卒で新潟大学医学部助手を勤められ、昭和51(1976)年に山形大学整形外科学助教授に栄転されました。昭和54(1979)年には琉球大学保健学部附属病院助教授として赴任され、昭和56(1981)年附属病院教授、昭和57(1982)年琉球大学医学部の開設に伴い初代教授として整形外科を開講されました。

昭和47(1972)年5月15日に沖縄県が本土に復帰し、沖縄県には医学部がなかったため年100名が国費留学生として国内の50大学に配置され、この国費留学制度は琉球大学医学部の設立に伴い昭和55(1980)年に廃止されました。琉大設立前、沖縄県は県立中部病院を頂点とした医療制度となっており、茨木先生が教授に就任された当初は沖縄県病院局との交渉に大変苦勞されたと聞いておりました。琉球大学整形外科は当初4名のスタッフでスタートしましたが、茨木先生のリーダーシップに惹かれ入局者は増加し、2024年の現在、医局員は122名と琉球大学の中でも一大医局になっており、関連病院も民間病院を主体に増加し離島を含めた沖縄全県をカバーしております。これもひとえに創始者としての茨木教授の先駆性と突破力のおかげと感じております。茨木先生は平成3(1991)年～平成5(1993)年琉球大学医学部附属病院長、平成5(1993)年～平成9(1997)年琉球大学医学部長として医学部の運営に携わり、この間に国際協力事業団(JICA)の活動の一環としてラオス国公衆衛生プロジェクト国内委員長を務め、病院プロジェクトの計画および遂行に御尽力され国際的な貢献も多大でした。琉球大学医学部は新潟大学寄生虫学教室初代教授の故大鶴正満先生(1916～2008、台北帝国大学医学部卒)が昭和53(1978)年1月、琉球大学医学部創設準備室長、翌年10月に同大学医学部が認可され初代の医学部長に就任され、医学部の創設、整備、発展に尽力されました。創設時の初代教授の一人である茨木先生はキングメーカーであり8名の新潟大学同門の教授の輩出に貢献されました。医動物学講座の佐藤良也教授(1987～2011、医学部長2008～2011、琉球大学理事・副学長2011～2013)、解剖学 平田幸男教授(1989～1999)、生化学 田中龍夫教授(1990～2000)、産科婦人科学 金澤浩二教授(1992

～2006、附属病院長2000～2002)、青木陽一教授(2006～2023)、眼科学 澤口昭一教授(1998～2116)、外科学 西巻正教授(2001～2119)、整形外科 金谷文則(2000～2019)、さらに琉球大学整形外科助教授の乗松 尋道先生が香川大学第2代整形外科教授(1990～2005)になりました。

学術的には日本整形外科学会、日本手外科学会と肘関節学会の理事を歴任され、平成8(1996)年には第39回日本手外科学会学術集会を初めて沖縄で開催し、恩師である田島達也新潟大学名誉教授や交流のあったTsu-Min Tsai先生(Louisville, Kentucky)を招待し盛会裡に終えることができました。整形外科学会、手外科学会では名誉教授になっておられます。

野球にも熱心であり率先して朝練にも参加し、日整会野球大会で優勝1回(1999)と準優勝2回を果たした整形外科野球部の礎を築きました。

平成12(2000)年に退職された後も沖縄整形外科振興会会長として沖縄にとどまれ、その後も北部病院の理事として年に数回ご指導を頂いておりました。退職後は食道がんや胃がんそして人工膝関節置換術と合併症など、いくつかの病気に罹患されましたが、その都度不死鳥のごとく回復され忘年会などで元気なお姿を拝見しておりました。2020年のCovid-19 pandemic後は直接お目にかかる機会はなく電話では連絡を取っておりましたが、昨年(2023)9月新潟大学産科婦人科の関根正幸先生が、琉球大学女性・生殖医学講座の教授に就任したことを電話でお伝えしたところ大変喜んでおられたのが最後の連絡となりました。

私が琉球大学に奉職でき、教授になれたのも茨木先生のお陰と感謝しております。先生の教えの中で「先輩は後輩を育てる責任があり、後輩は先輩を追い抜く義務がある」は座右の銘となっております。茨木先生、本当にお世話になりました。心より御冥福をお祈り申し上げます。



2024年度 各委員会委員

(五十音順・敬称略)

●常設委員会

緊急事態対応委員会

担 当 理 事	田 尻 康 人								
委 員 長	三 浦 俊 樹								
委 員	柳 林 聡	吉 田 進 二	若 林 良 明						
オブザーバー	面 川 庄 平	副 島 修	三 上 容 司						

財務委員会

担 当 理 事	田 尻 康 人								
委 員 長	森 崎 裕								
委 員	四 宮 陸 雄	柳 林 聡	吉 田 進 二	若 林 良 明					
オブザーバー	西 田 圭一郎								

教育研修・オンラインマガジン運用委員会

担 当 理 事	森 谷 浩 治								
委 員 長	小 野 真 平								
委 員	安 部 幸 雄	岩 倉 菜穂子	織 田 崇	金 城 養 典					
	河 野 友 祐	黒 田 拓 馬	兒 玉 真 博	齋 藤 太 晃					
	鈴 木 実佳子	竹 内 実知子	丸 山 真 博	森 田 晃 造					
アドバイザー	小 笹 泰 宏								
オブザーバー	佐々木 薫								

編集・用語委員会

担 当 理 事	池 口 良 輔								
委 員 長	土 田 真 嗣								
委 員	乾 淳 幸 貴	岩 本 卓 士	恵 木 丈	大 井 宏 之					
	大久保 宏 哉	大 佐々木 裕 美	河 佐 高 樹 律	栗 下 隆 司					
	小 蘭 直 志	園 辻 本 雄 一郎	佐 高 棚 松	山 松 須 山					
	頭 川 峰 薫 弘 司	松 井 田 史 郎	木 野 木 末 武 雄	那 須 丸 真 博					
	多 田 明 淳	吉 田 史 郎							
アドバイザー	横 小 田 良								

機能評価委員会

担 当 理 事	五 谷 寛 之								
委 員 長	志 村 治 彦								
委 員	飯 塚 照 史	越 後 歩	花 香 恵	藤 目 智 博					
	渡 邊 忠 良								
アドバイザー	金 内 ゆみ子								

担 当 理 事 委 員 長 委 員	佐 藤 和 毅 多 田 鐘 薫 秋 田 雄 弼 善 家 史 吉 吉 市 理 郎 村 原 景 司 田 田 景 一	岩 月 克 之 長 尾 聡 哉 柿 木 良 介	宇 佐 美 中 島 祐 金 谷 文	聡 子 則	鈴 木 藤 田 中 村 俊 康	拓 二 浩
-------------------------	---	-------------------------------	-------------------------	----------	--------------------------	----------

憲政中山祥玉兒朗也洋拓村田木依典広真樹泰將俊服建龜三部山浦

[illegible]

担 当 理 事	鳥谷部 莊 八	
委 員 長	安 田 匡 孝	
委 員	楠 原 寛 久	佐々木 信 幸
アドバイザー	辻 本 律	
アドバイザー(外部)	塚 田 敬 義	
外 部 委 員	山 我 美 佳	

[illegible]

専門医制度委員会

担 当 理 事	山 本 美知郎								
委 員 長	射 場 浩 介								
委 員	岡 久仁洋	河 村 健 二	栗 本 秀	櫻 庭 実					
	助 川 浩 士	辻 井 雅 也	中 島 祐 子	林 原 雅 子					
	藤 原 浩 芳	古 川 洋 志	吉 井 雄 一						
アドバイザー	田 中 克 己	西 田 圭一郎							

専門医資格認定委員会・施設認定委員会

担 当 理 事	橋 本 一 郎								
委 員 長	河 野 正 明								
委 員	岩 川 紘 子	金 谷 貴 子	鎌 田 雄 策	齋 藤 太 一					
	高 木 信 介	堀 内 孝 悦	松 井 雄 一郎	本 宮 哲 正					
アドバイザー	齊 藤 晋	中 尾 宏	長谷川 健二郎	森 田 哲 正					

専門医試験委員会

担 当 理 事	松 田 健								
委 員 長	佐々木 薫								
委 員	赤 羽 美 香	尼 子 雅 敏	新 井 健	石 河 利 広					
	今 泉 督 吾	大久保 宏 貴 士	奥 井 伸 幸 士	幸 田 久 慎 二					
	河 村 真 吾 也	白 幡 毅 士	助 川 浩 士	檜 崎 慎 二					
アドバイザー	田 中 啓 之	内 藤 聖 人	山 崎 宏						

カリキュラム委員会

担 当 理 事	佐 竹 寛 史								
委 員 長	日 高 典 昭								
委 員	乾 淳 幸	金 城 養 典 央	河 村 太 介	下 江 隆 司					
	田 鹿 毅	鍋 島 毅							

情報システム委員会

担 当 理 事	池 口 良 輔								
委 員 長	松 浦 佑 介								
委 員	岡 久仁洋	栗 本 秀	鈴 木 拓	松 井 雄一郎					
	宮 脇 剛 司	吉 井 雄 一							
アドバイザー	田 尻 康 人	村 瀬 剛							

キャリアアップ委員会

担 当 理 事	原 友 紀								
委 員 長	仲宗根 素 子								
委 員	赤 羽 美 香	有 光 小百合	岩 川 紘 子	大久保 ありさ					
	大 田 智 美	白 幡 毅 士	古 庄 寛 子	柳 林 聡					
	山 本 宗一郎								
アドバイザー	長 田 龍 介	新 関 祐 美	日比野 直 仁						

定款等検討委員会

担 当 理 事	川 崎 恵 吉								
委 員 長	前 田 和 洋								
委 員	岩 川 紘 子	太 田 英 之	加 地 良 雄	金 谷 耕 平					
	坂 本 相 哲	佐々木 信 幸	平 川 明 弘	村 田 景 一					
	森 田 晃 造								
アドバイザー	上 原 浩 介								

手外科専門医検討委員会

担 当 理 事	原 友 紀								
委 員 長	若 林 良 明								
委 員	上 原 浩 介	佐々木 薫	田 中 克 己	吉 田 史 郎					
アドバイザー	三上 容 司								

アンケート調査対応委員会

担 当 理 事	橋 本 一 郎								
委 員 長	山 本 真 一								
委 員	高 木 誠 司	西 浦 康 正	日 高 典 昭	村 瀬 剛					
アドバイザー	平 田 仁	篠 原 孝 明							

監 事 紹 介

島 田 賢 一 西 浦 康 正

教育研修会のお知らせ

◆2024年度教育研修会◆

会 期：2025年1月20日(月)～3月20日(木) ※予定
会 場：WEB開催(オンデマンド配信)
詳 細：準備中

.....

◆第68回日本手外科学会学術集会◆

会 期：2025年4月10日(木)～11日(金)
会 場：パシフィコ横浜ノース
会 長：三上 容司(横浜労災病院 整形外科)
詳 細：<https://www.2025jssh68.jp>

.....

関連学会・研究会のお知らせ

◆第35回日本末梢神経学会学術集会◆

会 期：2024年9月6日(金)～7日(土)
会 場：鹿児島県医師会館
会 長：高嶋 博(鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 脳神経内科・老年病学 教授)
詳 細：<https://www.congre.co.jp/jpns2024/index.html>

.....

◆第33回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会 期：2024年10月17日(木)～19日(土)
会 場：ヒルトン東京お台場
会 長：吉村 浩太郎(自治医科大学形成外科学講座 教授)
詳 細：<https://www.ipsrc.org/jp/>

.....

◆第39回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会 期：2024年10月17日(木)～18日(金)
会 場：京王プラザホテル
会 長：仁木 久照(聖マリアンナ医科大学整形外科学講座 主任教授)
詳 細：<https://site2.convention.co.jp/joakiso2024/>

◆第51回日本マイクロサージャリー学会学術集会◆

会 期：2024年11月28日(木)～29日(金)
会 場：奈良春日野国際フォーラム 麓～I・RA・KA～
会 長：村田 景一(市立奈良病院 四肢外傷センター センター長)
詳 細：<https://www.congre.co.jp/jsrm51nara/index.html>

◆第35回日本小児整形外科学会学術集会◆

会 期：2024年12月13日(金)～14日(土)
会 場：福岡国際会議場
会 長：高村 和幸(福岡市立こども病院 運動器センター 顧問)
詳 細：<https://www.jpoa2024.org/index.html>

◆第42回中部日本手外科研究会◆

会 期：2025年1月25日(土)
会 場：京都府民総合交流プラザ 京都テルサ
会 長：藤原 浩芳(京都第二赤十字病院)
詳 細：<https://www.acplan.jp/ejssh42/index.html>

◆第39回東日本手外科研究会◆

会 期：2025年2月22日(土)
会 場：北海道立道民活動センター かでる2・7
会 長：射場 浩介(札幌医科大学 運動器抗加齢医学)
詳 細：<https://www.congre.co.jp/ejssh2025/index.html>

◆第46回九州手外科研究会◆

会 期：2025年2月1日(土)
会 場：宮崎市民プラザ
会 長：甲斐 糸乃(独立行政法人 地域医療機能推進機構 宮崎江南病院)
詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/khand/index.html>

◆第37回日本肘関節学会学術集会◆

会 期：2025年3月14日(金)～15日(土)
会 場：岡山コンベンションセンター
会 長：今谷 潤也(岡山済生会総合病院 副院長)
詳 細：<https://www.kwcs.jp/elbow2025/index.html>

.....

◆第68回日本形成外科学会総会・学術集会◆

会 期：2025年4月16日(水)～18日(金)
会 場：ホテルニューオータニ
会 長：櫻井 裕之(東京女子医科大学形成外科)
詳 細：<https://site.convention.co.jp/jsprs68/>

.....

◆第37回日本ハンドセラピー学会学術集会◆

会 期：2025年4月11日(金)～12日(土)
会 場：パシフィコ横浜 ノース 4F
会 長：井部 光滋(札幌徳洲会病院 整形外科外傷センター)
詳 細：<https://www.jhts37hand.jp/index.html>

.....

◆第98回日本整形外科学会学術総会◆

会 期：2025年5月22日(木)～25日(日)
会 場：東京国際フォーラム・JP タワー ホール&カンファレンス
会 長：岩崎 倫政(北海道大学大学院 医学研究院整形外科学教室 教授)
詳 細：<https://www.congre.co.jp/joa2025/index.html>

編 集 後 記

日手会ニュース2024年号外号をお届けします。新型コロナウイルス感染症についてはまだ罹患される方々もおられるものの、私達の生活はほとんど正常化してきていると言えます。2024年4月25日～26日奈良県立医科大学手の外科学講座教授面川庄平会長主催の第67回日本手外科学会は、現地開催とオンデマンド配信で、引き続き多くの先生方が参加できる学会にさせていただきました。これからの学会ではこのような形式が定着し、学会参加者や会員の増加にもつながると期待します。

新理事体制も決まり、今回の日手会ニュース号外号では、酒井昭典新理事長、岩崎倫政前理事長、田尻康人副理事長、松田健副理事長、そして各理事の先生方から今後の抱負をいただいております。また新名誉会員となりました田中克己先生、坪川直人先生、そして新特別会員の柿木良介先生、亀井譲先生、渡邊健太郎先生のお言葉も掲載いたしました。また2023年11月にご逝去されました茨木邦夫先生の追悼文を金谷文則先生にご寄稿いただいております。謹んでご冥福をお祈りいたします。

私達日手会員が今後、様々な立場の違いを乗り越えてより一層団結することで、日本手外科学会のさらなる周知や今後の発展につながると 생각합니다。広報渉外委員会といたしましても、今回から佐々木規博先生、西脇正夫先生、藤田浩二先生を新メンバーに迎え、佐竹寛史担当理事の元、今後も手外科情報の発信など、学会を盛り上げていきたいと思っています。どうか今後ともよろしくお願いいたします。

(文責：兵庫県立加古川医療センター 中川夏子)

広報渉外委員会

(担当理事：佐竹寛史，委員長：中川夏子，アドバイザー：岸 陽子
委員：佐々木規博，堂後隆彦，西脇正夫，藤田浩二，宮崎洋一)